

# 守護山名氏の石見国支配

渡 邊 大 門

## 一 はじめに

中世後期における石見国の研究は、そう多いとは言えない。石見には多くの史料が残されているが、『新修島根県史』（史料篇<sup>1</sup> 古代・中世）は昭和四十三年（一九六八）の刊行で、すでに四十余年を経過している。掲載されている史料もその一部を挙げているに過ぎず、使い勝手が良くないところである。また、『新修島根県史』以後に刊行された史料集も、今や入手したいものが多い。こうした史料集の状況が、研究の進展を妨げているといっても過言ではないであろう。学術誌における個別の史料紹介はいくつもなされているので、今後史料集の充実が研究進展の大きな鍵になるところである。

そうした中で、特筆されるのは益田氏など一部の領主層の研究であるが、石見国守護の研究に関しては極めて乏しいのが現状であるといえよう。<sup>①</sup>佐藤註（<sup>1</sup>）の研究によると、建武三年（一三三六）五月に上野頼兼が石見国守護に就任してから、高師泰、沙弥某、荒川詮頼、山名時義の補任を経て、貞治五年（一三六六）以降は大内氏がほぼ独占するところとなった（一時期、荒川氏が就任した時期がある）。しかし、佐藤の研究はその副題が示すように、明徳三年（一三九二）の南北朝合一を一つの区切りとしており、以後の守護補任沿革に関しては触れられていない。

『日本史総覧』によれば、以後の石見国守護の補任状況については、応永の乱（応永六年・一三九九）で大内義

弘が敗死すると、その後継守護は京極高詮が就任したとする<sup>(2)</sup>。そして、応永九年（一四〇二）六月に山名氏利が石見国守護に就任すると、文明九年（一四七七）まで山名氏歴代が続いて補任されている。ただ、山名氏が石見国守護としていかなる活動をしたのかは、史料の制約などもあって、必ずしも十分に明らかにされていない<sup>(3)</sup>。その中で特筆されるのは、岸田裕之の研究である<sup>(4)</sup>。岸田は山名氏利期における石見国守護の特質について、次のような指摘を行った。

①（山名氏の）石見国支配は、惣領山名常熙（安芸国・備後国守護）の統制のもとに芸備両国支配と密接な関係を保ちつつおこなわれた。

②（山名氏は）国人領主の畠田面積の減少を認め、諸役の負担を軽減することによって、国人領主層の懐柔をおこなっている。

③応永年間の中頃には、守護段銭の成立が確かめられる。

④国人領主に対して、所領高賦課方式による役賦課がおこなわれていた可能性がある。

以上の指摘は益田氏の事例に基づくものとしながらも、益田氏が守護山名氏と密接な関係を保ちながら、その領主制を展開したことを指摘している。また、応永の乱以後、周防・長門に守護職を保持する大内氏に対して、室町幕府が山名氏に安芸・備後・石見の守護職を与えることにより、大内氏牽制の役割を与えたとの興味深い指摘もなされている。

そこで、本稿では以上の岸田による成果に学びつつ、山名氏が石見国守護であった期間を対象にして、その支配や国人との関係を明らかにすることとしたい。

## 二 山名氏利による石見国支配

先述のとおり応永九年（一四〇二）六月、山名氏利が石見国守護に就任したといわれている。しかし、実際に就任したのは、その前年の応永八年（一四〇一）ではないかと考えられる。<sup>(5)</sup> その根拠としては、次の史料を見出すことができる。

石見国豊田郷菅谷・中谷并同国貞松名事、任本知行之旨、領掌不可有相違之状如件、

応永八年十一月七日

（山名氏利）  
左京亮（花押影）

豊田肥前入道殿<sup>(6)</sup>

史料の宛先の豊田氏は、もともと遠江国城飼郡内田荘下郷を本拠とする鎌倉御家人内田氏の末裔である。応永八年（一四〇一）以降、「内田家文書」に登場する内田氏は内田姓を名乗らなくなり、豊田姓を称するようになるという。その理由は、詳らかにされていない。この史料は、石見国守護山名氏利が豊田肥前入道に対し、石見国豊田郷菅谷・中谷并同国貞松名の本知行を安堵したものである。内田氏が石見国守護から所領安堵を受けていたことは、前任の大内氏の例に見られることから、この史料は氏利による石見国守護の確実な初見とみなしてよいであろう。<sup>(7)</sup> 氏利は石見国守護として、豊田（内田）氏の本知行を安堵する主体だったのである。したがって、『日本史総覧』の石見国守護の補任に関する記載は、修正する必要がある。<sup>(8)</sup>

こうした山名氏による所領安堵に関しては、次の史料により確認することができる。

石見國所々領知事、任相傳之旨、本新并當知行地悉領掌不可有相違之状如件、

應永九年六月一日

大内弘茂也  
左京亮 判  
（山名氏利）

周布次郎殿<sup>(兼宗)</sup>

この史料の宛先の周布氏は益田氏の流れを汲み、石見国周布郷に本拠を置いた領主である。発給者「左京亮」の傍註には「大内弘茂也」と記されているが、左京亮という官途からして山名氏利の誤りである。内容は岸田註(4)論文が指摘するように、本領、新恩地、当知行地を区分して安堵したものである。この約三ヶ月後、周布氏は足利義満から周布郷以下の安堵を受け、管領である畠山基国から氏利に対して、その旨が通達されているのである。<sup>(10)</sup>所領安堵は、益田兼顕(兼世)に対しても行われた。<sup>(11)</sup>しかし、この場合は「任御判之旨」とあるように、將軍の命を遵行したものであった。氏利が安堵した例は出羽氏にも見られるが、実質的に大内氏に代わり氏利が守護として入部したことに伴う、所領安堵とみなすことができよう。<sup>(12)</sup>そして、それは守護山名氏独自というよりも、將軍の命を受けていることに注意を払うべきである。

次に、益田氏の事例を確認することにした。

石見國益田越中入道知行分所々公田数事、佰肆拾陸町參段三百歩内、近年依不・河成、令減少之由申之間、所免除肆拾陸町參反三百歩也、仍相殘可有勤仕佰町分諸役之狀如件、

應永九年六月十一日

(山名氏利)  
左京亮(花押)

益田越中入道殿<sup>(道兼・兼顕)</sup>

この史料は、益田氏知行分の公田一四六町三段三〇〇歩のうち、河成によって減少したことを受け、四六町三段三〇〇歩を控除して、残り一〇〇町に諸役を賦課したことを示している。この点に関して田沼睦は、安定した地位を得た守護が領国内で独自の権限で公田再編を行ったと指摘を行った。<sup>(14)</sup>この事実は、冒頭に掲出した岸田による指摘②につながるものである。岸田によると、この事例は単に守護による政策とみなすだけでなく、大内盛見追討に貢献した益田氏への懷柔策、そして以後の良好な関係を結ぶための措置と捉えられている。

公田再編という視点について、大内氏の例と比較しておきたい。康応元年（一三八九）八月、大内義弘は周布兼仲知行分の公田が大洪水によって被害を受けたことに伴い、守護代の検見を経て、公田一〇町に公事を賦課している。<sup>⑮</sup>そして、このことは管領斯波義將の奉書によって、改めて周布兼仲に伝えられているのである。<sup>⑯</sup>そこからは、康応元年（一三八九）六月五日・七日に洪水があったという事実が、石見国守護大内義弘からの注進に基づくものであったことがわかる。つまり、災害による配慮と言うべきものは、すでに大内氏の代から行われていたことを確認することができる。この点を考慮するならば、公田再編は山名氏独自というよりも、大内氏の政策を引き継ぐものと評価できよう。

また、大内義弘が益田氏の所領に守護使不入と臨時課役の賦課免除を行ったことが知られている。<sup>⑰</sup>この事例を受けて、大内盛見は同様の措置を行っている。<sup>⑱</sup>益田氏が石見国で最大の領主であったことは言うまでもないが、大内氏自身が益田氏懐柔のためにこうした施策を行ったことは疑いない。つまり、氏利が大内義弘討伐後の混乱の最中に石見国守護に補任されたが、基本的には大内氏の施策を継承したとみなすべきである。その点を要約するならば、次のようになる。

① 石見国内の領主の当知行安堵。

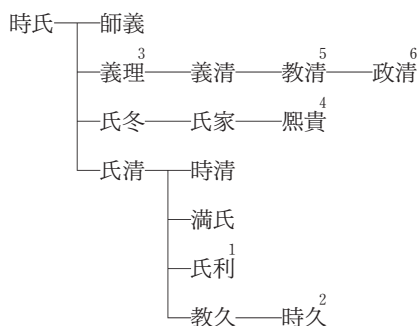
② 災害に伴う図田面積の減少の承認。

ところが、氏利関係の史料は乏しく、岸田註（４）によると、氏利は応永十一年（一四〇四）中に不慮の死を遂げたと考えられている。

### 三 山名義理・教清による石見国支配

氏利の死後、その跡を継承したのは義理であるが、この間に時久が石見国守護を継承した可能性があることを指

山名氏略系図



※ゴシックが石見国守護。番号は守護職の継承の順番

摘しておきたい。<sup>(19)</sup>義理についても関連史料は乏しく、わずか三通を確認したに止まる。応永十三年（一四〇六）十一月、義理は波多野道弘の讓狀に任せて、長野荘内美濃地頭職の知行を益田氏に認めている。<sup>(20)</sup>この点に関しては、従来と変わらないところであろう。そして翌年、義理は「御判」に任せ、益田氏の本領安堵を行っていることを確認できる。<sup>(21)</sup>同時に発給されたのが、次の史料である。

○モト封紙ウハ書ナラン、

「入澤土佐<sup>(慶明)</sup>入道殿 沙弥色貞<sup>(大町)</sup>」

益田越中入道周兼申、石見國所々段錢弁事、公田捌拾貳町九反半所役近年勤仕云々、然者向後可被致其沙汰之由候也、仍

執達如件、

應永十四年十二月十一日

入澤土佐<sup>(慶明)</sup>入道殿<sup>(22)</sup>

沙弥<sup>(大町色貞)</sup>  
(花押)

差出人の沙弥とは山名氏奉行人の大町色貞であり、宛先の入澤土佐入道慶明は石見国守護代である。ともに山名家中を構成する重要なメンバーであるが、史料の制約もあって出自等は詳らかではない。義理の代に至って、石見国内に守護代が配置され、あわせて守護膝下の奉行人が置かれたことを確認することができる。そして、この史料によって、益田氏が知行する石見国内の公田八二町九反半において、段錢が賦課されたことが判明する。つまり、この段階において、いわゆる守護段錢の賦課が始まったと考えられるのである。しかし、残念ながら以降における

義理の動向は不明となり、石見国守護職は教清に引き継がれることになる。

応永十七年（一四一〇）八月、山名常勝（教清）は益田氏に対して、長野荘内得屋郷地頭職（四分の一除く）を安堵した。<sup>(23)</sup>この措置に伴って、山名氏奉行人奉書（奉行人・大町色貞）が守護代入澤氏に発給され、下地を打ち渡すように命じられている。<sup>(24)</sup>同時にこの史料では、当該地の給人に替地を与えることも命じられた。守護代入澤氏が実際に遵行を行ったのは、約一ヶ月後の九月のことであるが、これは替地を準備する都合や守護が在京していたことに原因があったと考えられる。<sup>(25)</sup>守護が判物を発給して当該地の安堵を命じ、守護奉行人から守護代へ伝達される経路は、義理の時代を踏襲したといってもよい。加えて守護代内奉行によって、打渡状が発給されていることにも注目すべきであろう。<sup>(26)</sup>史料の残存度の問題もあるが、常勝の時代に至って、守護による支配機構がいつそう整ったのである。

このように山名氏による石見国支配は機構整備が行われたのであるが、その後の状況はどうだったのだろうか。次に、その点について考えてみたい。応永十八年（一四一一）、管領畠山満家は御判の旨に任せて、益田兼家の所領である益田本荘、長野荘などの安堵を行った。<sup>(27)</sup>これを受けて、山名教清は幕府の命に従って、兼家の所領を安堵している。益田家の所領安堵は、將軍↓管領↓守護という経路で行われていたことを確認することができる。<sup>(28)</sup>では、寺院に関わる場合は、どのように対応していたのであろうか。その点に関しては、次の史料がある。

安富庶子坂本分、益田崇観寺當住知行候、仍彼在所、可請御判申之由候、可然様、可有御披露候、巨細使者僧可被申候、恐々謹言、

義宗（花押）

八月廿八日

（清重・統空）

高山石見殿

（清重）  
大町美作殿<sup>(30)</sup>

史料冒頭の安富氏は、石見国長野莊安富郷を本拠とする益田氏の庶流である。その動向については『安富家文書』（全十五通）によって知られるが、史料のほとんどが南北朝期を中心としている。崇観寺は益田氏が建立した天台宗寺院として栄えたが、戦国期以降は衰退し、現在は医光寺と名称が変わっている。この史料が示すとおり、崇観寺の当住持は、安富氏の庶子坂本分（安富郷内）の安堵の御判を請うているのである。この場合の御判とは、將軍のものではなく石見国守護山名氏のものと考えてよいであろう。守護代義宗は、守護膝下の奉行人である高山・大町の両氏に対して、この旨を守護に披露するよう伝えているのである。ちなみに高山氏・大町氏ともに実名に「清」が用いられているが、これは山名教清から「清」字を与えられたと考えてよい。

ところで、当該期の守護奉行人は、高山清重（統空）、大町清量の兩名のみではなかった。例えば、次のような史料がある。

○モト封紙ウハ書ナラン、

（異筆）  
「大町山城入道判」

石州奉行人御中 沙弥色貞<sup>（大町）</sup>

石見国益田庄内崇観寺免田拾町半段銭事、所被寄附也、然者向後可被止催促之由候也、仍執達如件、

応永廿四年九月十四日

（大町色貞）  
沙弥（花押）

石州

奉行人御中<sup>③</sup>

この史料は崇観寺に対して、山名氏が益田荘内の免田一〇町半の段銭を寄附したので、同地の段銭徴収の催促を行わないよう、大町色貞が石見国の奉行衆に伝えたものである。大町氏が在京守護山名氏の意を奉じていることは、「之由候也、仍執達如件」という奉書文言と宛名に「石州奉行人」と記していることから明らかである。山名氏は



独自に段銭を課していたため、その免除に関しても当然命令する立場にあった。同年と思しき大町色貞書状によつて、益田氏から崇観寺分段銭免除の申し出があったので、それを認める内容の奉行人奉書を発給したと記されている。<sup>(32)</sup>このように山名氏には、在京守護の膝下奉行人と石見国で実務に当たる奉行人との二系統が存在したことが判明する。そして、この「石州奉行人」とは、実際に石見支配を担当した守護代内奉行人と考えて差し支えないと考えられる。

守護膝下にあった大町氏は、在京中に大きな役割を果たしていた。年末詳ながら、益田氏は所領をめぐつて訴訟を起こしていたが、早々に落居したことが分かる。<sup>(33)</sup>加えて書状の末尾では、石見国において公事賦課が先例になる旨が記されている。公事の賦課もまた、守護独自のものであった。大町氏は守護膝下において、重要事項の意思決定に関与していたのである。大町氏が訴訟の仲介に関与したことや、所領安堵、京着年貢の受取りに関わっていたことは、他の史料によつてもうかがうことができる。<sup>(34)</sup>

#### 四 山名熙貴期の石見国支配

応永二十年代後半から永享初年にかけて、石見国における山名氏関係史料は見られなくなる。この間、石見国守護も常勝から熙貴へと代わった。その初見史料を次に示しておく。

益田孫次郎

兼堯

(押紙、朱書)

(足利)

義教公方御判之由傳來候、後二所糺、

(大)

山名中務太輔熙貴之判也、

守護山名氏の石見国支配

永享九

十一月十四日 (山名熙貴)<sup>(35)</sup>  
(花押)

この史料は、石見国守護山名熙貴が益田孫次郎に対して、「兼堯」と名乗るように伝えたものである。特に、熙貴が名前の一字を与えたものではないが、益田氏と山名氏が入魂の間柄にあったことを示している。兼堯が益田家の惣領職を継承し、本領を安堵した事実については、山名熙貴の遵行状によって明らかである。<sup>(36)</sup>この遵行状には、同年九月二十七日に発給された將軍の御判とともに、応永二十九年（一四二二）閏十月に山名教清（常勝）が発給した遵行状（益田兼理の所領安堵）もあがっている。<sup>(37)</sup>このように、過去の遵行状をあげている点から、山名氏が益田氏に対して少なからず影響ある立場にあったことがうかがえる。

その後、熙貴は国人間の相論において、將軍の命を受け仲介に当たった。

三隅能登守与益田孫次郎不快事、不可然之趣、堅被仰下之間、即令和睦云々、此上者、被官人等相互令帰郷、  
（信兼）  
（兼堯）  
自他可成水魚之思、万一背此旨、致確執者、就先進可被處罪科之由、所被仰下也、仍執達如件、

永享十一年十一月十四日

（細川持之）  
右京大夫（花押）

（熙貴）  
山名中務大輔殿

この史料は三隅信兼と益田兼堯との争いに対して、すでに將軍から和睦を結ぶよう命じられており、和睦を結んだうえは被官人を帰郷させるよう、改めて熙貴に命じたものである。岸田註（4）論文が指摘するように、信兼と兼堯との間の被官人争奪が問題となっており、相論を幕府と守護山名氏が一体となって解決を図ろうとしたのである。益田氏と三隅氏との確執については、『満濟准后日記』正長二年六月二十七日条に記録が残されている。その概要を示すと、次のようになる。

益田氏と三隅氏が争っていることは、まず長門・周防国守護の大内盛見から内々に益田・周布・福屋の三氏につ

いて申し入れがあった。幕府は御内書を盛見に下し、益田氏と三隅氏の争いを停止するように命じたが、なぜ当該国の石見国守護山名氏が関与しなかったのか判然としない。おそらく三隅氏は大内氏と通じており、盛見のルートによって解決を図ろうとしたのであろう。これを受けて、幕府はどのようにして山名氏に命じるべきか、満済に意見を聴取しているのである。満済の提案は、①取り急ぎ合戦を止めさせること、②合戦の原因を究明すること、③①②を踏まえて、山名氏に事の子細を尋ねること、であった。つまり、当初の山名氏は、領国内における国人間の紛争に関与していなかったのである。

正長二年以降の益田氏と三隅氏の争いの経過は不明であるが、徐々に解決へ方向へと向かっていったことが分かる。永享十一年十二月、三隅氏は山名氏被官人の山口豊俊守と高山清重に宛てて、幕府の命に従い益田氏被官人に扶持を与えないことを誓っている。<sup>(39)</sup>同様に、吉見頼弘も益田氏被官人に指南・扶持をしないと誓約しているのである。<sup>(40)</sup>つまり、争いは単に益田氏と三隅氏だけでなく、石見国内における多くの領主を巻き込んでいたことがわかる。『満済准后日記』正長二年六月二十七日条には、周布・福屋の二氏の名前があがっているが、山名熙貴は彼らとの和睦も含めて兼堯に命じているのである。<sup>(41)</sup>一連の騒動に関しては、三隅信兼が起請文を提出し、何とか落着くところとなった。<sup>(42)</sup>

当初、山名氏は国人間の紛争に介入することが困難であったと考えられる。その背景には、国人らが内氏と関係重視していたなど、複雑な事情があったと推測される。応永十二年（一四〇五）一月、福屋、周布、三隅、益田、吉見の五氏は、起請文を交わして互いの結束を強めた。<sup>(43)</sup>岸田註（4）論文が指摘するように、石見国人間における領主層の結合は、非常に密接なものがあったのである。

次に、山名熙貴による知行安堵について確認しておきたい。山名熙貴の知行安堵に関しては、判物によるものを確認することができる。

石見国豊田郷内俣賀村事、依有子細雖押置、俣賀万歳丸嘆申之間、如元知行不可有相違之状如件、

嘉吉元年卯月廿二日

熙貴<sup>(山名)</sup>（花押）<sup>(43)</sup>

史料中の俣賀氏は先に触れた内田氏の庶流であり、豊田郷俣賀村に所領を得たため俣賀を姓とした。俣賀万歳丸の実名は不明であるが、万歳丸と言う名前から考えて、まだ家督継承前の幼少の人物であつたと考えられる。すると、史料中の「俣賀万歳丸嘆申之間」という表現から、俣賀家内部で豊田郷俣賀村をめぐる相論に発展していた可能性が高い。熙貴は、俣賀家の所領紛争を解決しうる存在であつたといふことができる。その後、この一件は守護代である山名清宗により、「今月廿二日御判旨」に任せて下地が俣賀万歳丸に打ち渡された<sup>(45)</sup>。さらに、熙貴の判物を受けて、俣賀万歳丸の豊田郷俣賀村の知行を安堵した旨の山名氏奉行人連署奉書が発給されている<sup>(46)</sup>。このように、知行安堵に関しては、守護、守護代、守護奉行人から安堵を受けていたことがわかるのである。

## 五 山名教清（常勝）・政清期の石見国支配

嘉吉元年（一四四一）に勃発した嘉吉の乱によつて、山名熙貴は現場に居合わせたため、不幸にも横死することとなつた。その跡を継承したのは、山名教清（常勝）であつた。嘉吉三年（一四四三）、常勝は室町幕府御教書によつて、周布和兼の所領安堵を命じられている<sup>(47)</sup>。翌年の文安元年（一四四四）六月、常勝は守護代である山名清宗に対して、和兼の所領安堵を命じた<sup>(48)</sup>。こうした事例により、幕府から守護そして現地守護代への命令系統を改めて確認することができる。

文安元年（一四四四）六月には、周布和兼の石見国における所領について、同月十八日の遵行状に任せ、和兼の代官に下地を沙汰するよう山名氏奉行人連署奉書が発給されている<sup>(49)</sup>。奉行人には、前代から引き続き大町清量、高山清重が務め、新たに兼家（性不詳）が加わつた。史料中の遵行状とは、室町幕府の命を受けた常勝が発給したも

のである。この史料の宛先の美甘左京亮は、おそらく先述の石見国奉行衆の一人であると考えてよいであろう。<sup>(50)</sup>この史料は、「以此旨可有御披露候也」と結ばれている。この意味は、美甘氏から守護代に披露されることを示している。美甘氏は山名清宗の配下にあり、取次の役割を果たしていたのである。

山名氏の奉行人奉書から一ヶ月遅れで発給されたのが、守護代山名清宗の打渡状である。<sup>(51)</sup>清宗もまた、前代から引き続き守護代を務めていた。この打渡状では、和兼の代官に下地を沙汰するように命じているが、史料の後半部分には「但安田・福井・西河内三箇所之事者、京都御左右之間除之者也」と記されている。つまり、いったんは和兼の知行地安堵を認めたものの、室町幕府の判断もあって、安田以下三ヶ所は除くことを伝えている。打渡状の宛名が周布和兼になっていることから、守護代から当事者に直接充てたことになる。したがって、在京守護の奉行人から石見国奉行人へ命令が伝えられ、石見国奉行人が守護代に披露するという仕組みが成り立っていたことがわかるのである。

文安元年（一四四四）十一月、益田兼堯は赤松満政らの討伐のため出陣するように命じられた。史料中に「不日令発向、属守護手」とあるように、山名常勝（教清）に従うことが明記されている。嘉吉の乱後、赤松満政は播磨国三郡を御料所として与えられた（播磨国の残りは山名氏に与えられた）。しかし、嘉吉四年（一四四四）一月には山名持豊の強い意向によって、播磨国三郡が満政から取り上げられ、持豊に与えられている。この措置に不満を感じた満政は、同年十月に一族とともに播磨国に下向したのである。そこで、室町幕府は、無断で播磨国に下向した満政を討伐すべく軍を派遣した。<sup>(52)</sup>益田氏も従軍を余儀なくされたのであった。このように、益田氏が守護山名氏のもとで軍事行動を行った例は、他にもいくつか見られる。

例えば、寛正二年（一四六一）、室町幕府は畠山義就の討伐を行っているが、その際に山名是豊が益田兼堯の着陣を幕府に報告したことが分かる。<sup>(54)</sup>益田氏は山名氏の配下にあつて、軍事行動に参加していたのである。同年六月

十二日、河内国切山で合戦が行なわれ、兼堯軍は益田左京亮が討ち死にし、他に一族・被官人の多くが負傷した。その手負注文を室町幕府に提出したのは、山名是豊であった。<sup>(55)</sup>同時に山名政清が兼堯に対して、感状を発給しているのである。<sup>(56)</sup>この事例を見る限りにおいては、幕府への報告は是豊が行い、益田氏への感状発給は政清が行っていたことがわかる。<sup>(57)</sup>是豊は山名氏の惣領家であったことから、一族を統括する立場にあったと考えられ、代表して報告したのであろう。

では、教清（常勝）から政清へと守護が交代した時期は、いつのことだったのであろうか。享徳四年（一四五五）六月十九日に石見国守護山名常勝（教清）は、一通の安堵状を認めている。<sup>(58)</sup>内容は長野荘内の吉田郷地頭職を保持していた吉田又次郎に男子がなかったため、その娘阿香女に譲ることとし、益田兼堯の子息である熊次郎との養子縁組により、吉田家の継承を常勝（教清）が認めたものである。この安堵状発給を仲介したのは、有力な被官人の高山統空（清重）であった。<sup>(59)</sup>益田氏はこの安堵状を手に入れるために五百疋の費用を要し、同時に「御曹司様（＝政清）」に対しても、一二百疋を贈っている。政清のお礼の返事は、「御所之始」と称されているように、初めて発給した文書であった。<sup>(60)</sup>政清が常勝（教清）から石見国守護を継承したのは、少なくともこれ以降といえる。

しかし、政清による石見支配は不明な点も多く、そう長く続かなかったと考えられる。応仁・文明の乱が始まった直後、次の史料を確認することができる。

石見国之儀、<sup>(山名)</sup>政清於于今御方ニ不参之上者、守護職事<sup>(山名)</sup>是豊ニ可令申沙汰候、随彼下知可被致忠節候、若難渋之輩者、一段可被処罪科候、此等之趣各可被存知也、恐々謹言、

応仁式

十月二日

<sup>(細川)</sup>勝元（花押影）

豊田殿<sup>(61)</sup>

この史料は、石見国守護である山名政清が味方に参上しないので、山名是豊を石見国守護に任命したことを伝え、以後は是豊の下知に従うように内田氏に命じたものである。同文の文書は、石見国の国人出羽氏に対しても宛てられている。<sup>(62)</sup> 山名政清は山名宗全に従って西軍に属したが、是豊は細川勝元の配下となり東軍側で戦った。それゆえに勝元は政清の石見国守護職を無効とし、是豊に与えたのである。なお、『萩藩閥閥録』では、註(62)史料の年次を寛正三年(一四六二)に比定している。しかし、註(61)史料の存在や、応仁・文明の乱勃発時の状況を考慮すれば、応仁二年(一四六八)とするほうが適切である。

このような事態を受けて、政清は西軍に属して戦い、俣賀氏も同様に西軍の一員として軍事行動を展開したことを確認できる。

就作州進発、式部少輔下向候、別而有人数奔走、自身有参陣、被致粉骨候者、可為忠節候、延引候者国時宜可為徒事候、早参候者可令悦喜候、委細者少輔可申候、恐々謹言、<sup>(義宗)</sup>

八月廿八日<sup>(応仁元年)</sup>

政清<sup>(山名)</sup> (花押影)

俣賀左近将監殿<sup>(63)</sup>

同族の内田氏が是豊に従って東軍に属したのに対し、俣賀氏は政清に従って西軍に属して戦ったのである。政清が美作国に向かったのは、かつて政清自身が美作国守護であったにもかかわらず、応仁元年(一四六七)五月に赤松政則に奪還されたからである。<sup>(64)</sup> 史料中の式部少輔は石見国守護代の義宗を示しており、実際の軍事行動では実務を担っていた。翌月、義宗は俣賀氏が政清に従ったことを賞し、政清の御書を届けている。<sup>(65)</sup>

また、石見国では、益田貞兼が西軍に属して戦っていたが、益田家庶子の三隅豊信は東軍に属していた。豊信は「益田所帯」を競望したため、政清は豊信の所領を没収し、貞兼に与えるよう室町幕府に申請している。<sup>(66)</sup> 石見国内でも益田一族が東西両軍に分かれて戦ったことを示しているが、政清が貞兼を自軍に留めるには、所領の安堵とも



に敵方の所領を没収・付与することが必要だったのである。しかし、以後は山名氏の石見国における動向は見えなくなる。

## 六 むすびにかえて

最後に簡単にまとめておきたい。石見国は南北朝期以降、次々と守護が変わる地域であったが、十四世紀半ば過ぎに大内氏がほぼ独占した。山名氏が石見守護に就任するのは、十五世紀初頭以後のことである。また、岸田註(4)論文が指摘するように、応永の乱後、山名氏に大内氏牽制の役割が与えられた可能性も極めて高いと考えられる。そうした点を踏まえて、山名氏の石見支配に関しては、次のようにまとめられるであろう。

① 応永の乱直後に石見守護になった山名氏利は、基本的に石見国内の領主の当地行安堵、災害に伴う図田面積の減少の承認など、大内氏の政策を引き継ぐことによって支配を展開した。

② 義理・教清の代には、在京守護膝下の奉行人が整備され、石見国には守護代および守護代内奉行が置かれた。

益田氏の所領安堵は、幕府↓守護↓守護代の経路をもって行われている。とりわけ守護膝下の奉行人は、重要事項の意思決定に関わったと考えられる。

③ 熙貴の代には、三隅氏と益田氏との間に紛争が起こる。山名氏は国人間の紛争に介入することが困難であったが、幕府と一体となつてこれに対処した。

④ 教清・政清の代には戦乱が活発に起こり、石見国人を軍事動員して嘉吉の乱に参陣した。その際、山名氏惣領家の是豊に従っていたことがわかる。

⑤ 応仁・文明の乱では、政清は西軍の山名宗全に従ったが、是豊は東軍の細川勝元に従った。益田家においても惣領家と庶子家が分裂した様子を読み取れる。しかし、以後、石見における山名氏の史料は乏しくなり、やが



ては石見から姿を消すことになる。後継の守護は大内氏であった。

応仁・文明の乱において、山名氏が石見における守護権を喪失した理由を探るのは、非常に難しいところである。しかし、同時期の山名氏は、嘉吉の乱で与えられた播磨・美作・備前の赤松氏旧領国を失った。播磨の事例で言えば、山名氏は苛烈な支配を行っていたことが指摘されており、必ずしも在地の支持を得られなかったと考えられる<sup>(67)</sup>。それゆえ、山名氏の勢力が播磨に根付いたとは考えにくく、応仁・文明の乱勃発直後には、播磨国内の赤松氏旧臣が一斉に乱入した赤松氏勢力に従った。こうした点から、新たな領国で支配を展開することの難しさを看取することができる。

このように考えるならば、石見の場合でも事情は同じであり、同様の理由で山名氏が継続して支配を展開し得なかった可能性がある。応仁・文明の乱勃発後、石見の国人たちも東西両軍に分裂して争った<sup>(68)</sup>。複雑な政治情勢の中で、石見国人衆に対処したのは大内氏であった。こうした混乱期において、山名氏は国人の統制をうまく進められなかったと考えられよう。山名氏の没落後、石見を支配したのは、かつて守護を務めた大内氏であった。この点も赤松氏に奪われた播磨等三ヶ国の例に似ている。山名氏による石見支配については、なお多くの問題があるが、とりわけ支配の脆弱性の原因に関しては、今後の課題としたい。

## 註

- (1) 石見国の守護の研究に関しては、松岡久人「南北朝室町期石見国と大内氏」(同『大内氏の研究』清文堂出版、二〇一一)、佐藤進一『室町幕府守護制度の研究』(南北朝諸国守護沿革考証編―下) (東京大学出版会、一九八八)の「石見国」の項がある。松岡論文の初出は、

『広島大学文学部紀要』三二巻一号(一九七三)。  
戦国期における石見国の政治情勢に関しては、倉恒康一「戦国初期の石見国の政治秩序について―明応期の紛争を通じて見た―」(『芸備地方史研究』二五四号、二〇〇七)も注目すべき研究である。

- (2) 小西四郎他監修『日本史総覧コンパクト版』(新人物

往来社、一九八七)の「室町幕府守護一覧」を参照。そのほかにも日本史関係の辞典には同様の表が付録として載せられるが、紙数の関係もあって典拠は提示されていない。

- (3) 山名氏の研究成果に関しては、拙著『中世後期山名氏の研究』(日本史料研究会、二〇〇九)の「序」を参照。同書刊行後の山名氏に関する論文は、稲垣翔「播磨国における山名氏権力の地域支配構造―郡単位の統治機構に注目して―」(『年報中世史研究』三五号、二〇一〇)、同「播磨国における山名氏権力の段銭收取構造」(『ヒストリア』一二四号、二〇一一)、拙稿「戦国期山名氏と寺社に関する一考察」(阿部猛編『中世政治史の研究』日本史料研究会、二〇一〇)が公表された。これまでの山名氏研究では、直接石見国支配に論及したものは乏しい。

- (4) 岸田裕之による石見国守護山名氏の分析については、「国人領主の惣庶関係と地域的連合の発展」、「芸石国人領主連合の展開」(同『大名領国制の構成的展開』吉川弘文館、一九八三)を参照。前者論文の原題・初出は「安芸国人一揆の形成とその崩壊 付論 安芸国における農民緊迫の歴史的発展について」(『史学研究』一四〇号、一九七八)。

- (5) 応永七年七月二日室町幕府御教書(『大日本古文書 益田家文書之一』一一号)は、大内盛見を退治するために、益田越中入道に対して大内弘茂に属して戦うように

命じたものである。史料中に「且被仰守護人畢」とあるが、『大日本古文書 益田家文書之一』では守護人を「山名氏利カ」としている。仮にこれが正しいとするならば、山名氏利の石見国守護就任は、さらに一年以上かかる事になる。今後、関連史料を博捜し、検討する必要がある。

- (6) なお、以下『大日本古文書 益田家文書之一』三を使用しているが、あわせて井上寛司・岡崎三郎編『史料集・益田兼堯とその時代―益田家文書の語る中世の益田(二)―』(益田市教育委員会、一九九四)を参照した。応永八年十一月七日山名氏利判物写(国守進「石見内田家文書について」、『山口県文書館研究紀要』一号、一九七二)。同史料は後に、伊藤清久氏所蔵「内田家文書」の重複した文書を除いて、岩澤愿彦監修・鈴木國弘編『日本大学総合図書館所蔵 俣賀文書』(日本大学文学部史学研究室、一九八六)に収録された。なお、国守紹介分の出典は「石見内田家文書」とし、『日本大学総合図書館所蔵 俣賀文書』の番号を記した。

また、『日本大学総合図書館所蔵 俣賀文書』は、日本大学所蔵分を『俣賀文書(日本大学所蔵)』と記し、飯島一郎氏所蔵分を『俣賀文書(飯島一郎氏所蔵)』と記した。「俣賀家文書」に関しては、上島有「ある文書の流転の旅―俣賀家文書の分散とその復元―」(『古文書研究』五五号、二〇〇二)も参照。以下、俣賀氏、内田氏の説明に関しては、以上の論文・編著書に拠ることをあらかじめ断っておく。

(7) 至徳三年四月八日大内義弘判物写（『石見内田家文書』八二号）。

(8) 応永の乱後、京極高詮が石見国守護職を足利義満から与えられたことは、応永六年十一月十五日足利義満袖判御教書案（『佐々木文書』、『大日本史料』七編之四）により明らかである。その二年後、高詮は死を間近に控えて子の高光に讓状を書き残した（応永八年八月二十五日足利義満袖判京極浄高（高詮）讓状案『佐々木文書』、『大日本史料』七編之五）。しかし、この讓状には、出雲・隠岐・飛騨三ヶ国の守護職を讓る旨は記されているが、石見国は記載されていない。したがって、少なくともこの時点で、高詮は石見国守護職を解任されたとみなすべきであろう。同時に、氏利が石見国守護に補任されたと考えるのが妥当である。

(9) 応永九年六月一日山名氏利判物写（『萩藩閥閥録』第三卷、卷二二一一）。

(10) 応永九年九月十六日足利義満袖判御教書写、応永九年十二月十九日管領畠山基国奉書写（以上、『萩藩閥閥録』第三卷、卷二二一一）。

(11) 応永十一年十一月十五日山名氏利遵行状（『大日本古文書 益田家文書之一』六四号）。なお、益田氏の主要な研究に関しては、次のものがある。以下の益田氏の叙述において参考にさせていただいた。

- ① 小林宏「石見国益田氏の領主制について」（安田元久編『初期封建制の研究』吉川弘文館、一九六四）。
- ② 国守進「石見国益田郷について」（小葉田淳教授退官

記念事業会編刊『国史論集』一九七〇）。

③ 福田栄次郎「石見国益田氏の研究―中世における領主制の展開とその特質―」（『歴史学研究』三九〇号、一九七二）。後に、岸田裕之編『戦国大名論集』6 中国大名の研究（吉川弘文館、一九八四）に所収。

④ 国守進「石見地方における領主制研究」（『地方史研究』一四八号、一九七七）。

⑤ 福田栄次郎『益田家文書』の「置文」について（『明治大学人文科学研究所紀要』三五卷、一九九四）。

⑥ 久留島典子「応仁文明の乱と益田氏―史料編纂所所蔵益田家文書中の差出不明仮名書状の考察―」（『東京大学史料編纂所研究紀要』一七号、二〇〇七）。

(12) 応永十年四月七日山名氏利判物（『出羽家文書』二二一号『山口県史』史料編中世三）。

(13) 応永九年六月十一日山名氏利判物（『大日本古文書 益田家文書之一』六三三）。

(14) 田沼睦「公田段銭と守護領国」（同『中世後期社会と公田体制』岩田書院、二〇〇七）。初出は、『書陵部紀要』二二一（一九六九）。

(15) 康応元年八月十三日大内義弘判物写（『萩藩閥閥録』第三卷、卷二二一一）。

(16) 康応元年十一月二日管領斯波義将奉書写（『萩藩閥閥録』第三卷、卷二二一一）。

(17) 康暦二年五月十四日大内義弘判物（『大日本古文書 益田家文書之一』三二二）。

- (18) 応永五年八月十日大内盛見判物（『大日本古文書 益田家文書之一』六二号）。

- (19) 応永十三年二月二十八日山名時久判物写（『萩藩閥閥録』第三卷、卷一二一一）。この史料は、周布兼宗が大家莊西郷内井尻村について由緒を嘆き申ししたが、桜井氏が押領に及んでいることから沙汰付をせず、時久が福光上村を兼宗に預け置いたものである。このほかには、年末詳三月二日山名時久書状（『大日本古文書 熊谷家文書』一〇八号）がある。

後者の史料は、備後・石見の兵を率いて、安芸に出陣することを熊谷在直に伝え、出陣を促したものである。いずれの史料を見ても、時久が石見において重要な地位つまり守護であつたと考えてよいであろう。

ただ、時久に関わる史料は管見の限り、わずか二通のみであるため、この点は今後の課題としておきたい。なお、かつて山名義理は、美作国守護を務めていたことが佐藤註（一）著作（美作国の項）で指摘されているが、死年は不明である。

- (20) 応永十三年十一月八日山名義理判物（『大日本古文書 益田家文書之二』五一八号）。翌年には、応永十四年十二月十一日山名義理判物（『大日本古文書 益田家文書之二』五二一号）によって、長野庄内黒谷郷地頭職が安堵されている。

- (21) 応永十四年十二月十一日山名義理遵行状（『大日本古文書 益田家文書之一』八二号）。

- (22) 応永十四年十二月十一日山名氏奉行人奉書（『大日本

古文書 益田家文書之一』八一号）。

- (23) 応永十七年八月四日山名常勝（教清）判物（『大日本古文書 益田家文書之一』八四号）。

- (24) 応永十七年八月四日山名氏奉行人奉書（『大日本古文書 益田家文書之一』八三号）。

- (25) 応永十七年九月九日守護代入澤慶明遵行状（『大日本古文書 益田家文書之一』八五号）。

- (26) 応永十七年九月九日守護代内奉行人打渡状（『大日本古文書 益田家文書之一』八六号）。この両名は、石見国守護代入澤氏配下の奉行人と解してよいであろう。ただ、守護代配下の奉行人の役割は史料の制約があり、十分に明らかにできなかった。

- (27) 応永十八年十二月二十六日管領畠山道端（満家）施行状（『大日本古文書 益田家文書之一』八七号）。

- (28) 応永十九年三月九日石見国守護山名常勝（教清）遵行状（『大日本古文書 益田家文書之一』八八号）。

- (29) 全く同じ時期に、常勝は幕府の意向に基づき、波多野氏に長野莊黒谷郷地頭職などを安堵している。応永十八年十二月二十六日管領畠山道端（満家）施行状（『大日本古文書 益田家文書之二』五二三号）、応永十九年三月九日石見国守護山名常勝（教清）遵行状（『大日本古文書 益田家文書之二』五二四号）。

- (30) 年末詳八月二十八日石見国守護代某義宗書状（『大日本古文書 益田家文書之一』九〇号）。宛先の高山清重（統空）に関しては、畑和良「岡本文書」所収の美作国関係中世史料」（『美作地域史研究』創刊号、二〇〇

八)を参照。余談ながら、連歌師として有名な高山宗嗣もこの一族の出身である。

(31) 応永二十四年九月十四日山名氏奉行人奉書(『大日本古文書 益田家文書之一』九二二号)。

(32) (応永二十四年)十月七日大町色貞書状(『大日本古文書 益田家文書之一』九三三号)。

(33) (年未詳)三月十二日大町色貞書状(『大日本古文書 益田家文書之一』五一九号)。なお、訴訟落居が叶ったことは、(年未詳)三月十二日山名教清(常清)書状(『大日本古文書 益田家文書之一』五一九号)にも記されている。

(34) (年未詳)五月十八日大町色貞書状(『大日本古文書 益田家文書之一』五二〇号)。

(35) 永享九年十一月十四日山名熙貴仮名并実名書出(『大日本古文書 益田家文書之一』一〇七号)。従来、この史料を受けて、年未詳六月十一日足立守祐書状(『大日本古文書 益田家文書之一』一〇〇号)があり、同書状によつて兼堯の本領安堵の状況が報告され、間もなく將軍から安堵の御教書が出される見通しを伝えたものとされてきた(井上・岡崎註(5)著作)。史料中の「屋形」は山名熙貴を示すと推測し、管領細川氏によつて熙貴の吹挙がされたと考えたのである。

しかし、久留島典子によつて、史料の発給者である足立守祐が明応・文亀年間に活躍した人物であると指摘された。したがつて、この書状は延徳二年のものと考えられ、史料中の「屋形」は大内義興を示すと指摘されている。

る。久留島典子「『大日本古文書 家わけ第二十二 益田家文書之一』」(『東京大学史料編纂所報』三五号、一九九九)を参照。

(36) 永享十年十一月二十二日石見国守護山名熙貴遵行状(『大日本古文書 益田家文書之一』一〇七号)。

(37) 応永二十九年閏十月九日山名教清(常勝)遵行状(『大日本古文書 益田家文書之一』九七号)。

(38) 永享十一年十一月十四日室町幕府御教書(『大日本古文書 益田家文書之一』一〇八号)。

(39) 永享十一年十二月晦日三隅信兼書状(『大日本古文書 益田家文書之三』五三八号)。

(40) (永享十一年)十二月三十日吉見頼弘書状(『大日本古文書 益田家文書之三』五三九号)。

(41) (永享十二年)二月二十八日山名熙貴書状(『大日本古文書 益田家文書之一』一〇九号)。

(42) 永享十二年八月十五日三隅信兼起請文(『大日本古文書 益田家文書之三』五四〇号)。

(43) 応永十二年一月十八日吉見頼弘・益田家兼・三隅氏世・周布兼宗・福屋氏兼起請文(「吉見家譜別録」山口県文書館所蔵)。

(44) 嘉吉元年四月二十二日山名熙貴判物(「俣賀文書(日本大学所蔵)」三七号)。

(45) 嘉吉元年四月二十六日山名清宗打渡状(「俣賀文書(日本大学所蔵)」三九号)。

(46) 嘉吉元年四月二十八日山名氏奉行人連署奉書(「俣賀文書(飯島一郎氏所蔵)」一九号)。この奉書には、豊後

守と右京亮の二人が署名をしているが、右京亮は高山清重である。

- (47) 嘉吉三年十二月二十九日室町幕府御教書（『周布家文書』二号『山口県史』史料編中世四）。

- (48) 文安元年六月十八日山名常勝（教清）遵行状（『周布家文書』三号『山口県史』史料編中世四）。

- (49) 文安元年六月二十四日山名氏奉行人連署奉書（『小川五郎収集文書』三号『山口県史』史料編中世三）。

- (50) 美甘とは、現在の岡山県真庭市美甘という地名を示している。したがって、美甘左京亮は美甘の出身である可能性が高い。嘉吉の乱以後、美作国守護は山名氏が務めていたので、そのときに被官化したのではないだろうか。この史料以外にも、山名氏配下的美甘氏を確認することができる。

- (1)（文安元年）十一月十六日高山清重書状（『大日本古文書 益田家文書之三』五六四号）。

- (2)（享徳四年）六月二十九日高山統空（清重）書状（『大日本古文書 益田家文書之三』五五〇号）。

山名氏家臣については未だ不明な点が多いが、数多くの国に守護職を保持した関係もあって、家臣の出自もさまざまである。今後、さらに検討することとしたい。山名氏家臣の構成については、拙稿「戦国期山名氏の内書と副状」（拙著『中世後期山名氏の研究』日本史料研究會、二〇〇九）を参照。原題・初出は、「戦国期における内書と副状―但馬国山名氏の事例を中心に―」（『皇學館論叢』二三九号、二〇〇七）。

- (51) 文安元年閏六月二十日山名清宗打渡状（『小川五郎収集文書』四号『山口県史』史料編中世三）。

- (52) 文安元年十一月二十二日室町幕府御教書（『大日本古文書 益田家文書之一』一三九号）。

- (53) 以上の経過に関しては、『上郡町史』第一巻などを参照。

- (54)（寛正二年）五月二十一日室町幕府奉行人連署奉書（『大日本古文書 益田家文書之一』一四五号）。この報告を受けて、畠山政長は兼堯の参陣を祝す書状を是豊に送っている。（寛正二年）五月二十四日畠山政長書状（『大日本古文書 益田家文書之一』一四七号）を参照。

- (55)（寛正二年）六月十四日室町幕府奉行人連署奉書（『大日本古文書 益田家文書之一』一五二号）。この室町幕府奉行人連署奉書は兼堯に宛てたもので、是豊がその功績を將軍に披露した旨が記されている。

山名是豊については、拙稿「山名是豊関係文書について―花押形状の分析を中心に―」（拙著『中世後期山名氏の研究』日本史料研究會、二〇〇九）。初出は、『但馬史研究』二六号（二〇〇三）。

- (56)（寛正二年）六月十四日山名政清感状（『大日本古文書 益田家文書之一』一五三号）。

- (57) 寛正四年（一四六三）四月の河内国赤坂合戦の際、益田兼堯の手負注文は山名是豊によつて室町幕府に報告されたことは、寛正四年四月九日室町幕府御教書（『大日本古文書 益田家文書之一』一七一号）により分かる。その直後、（寛正四年）四月十日山名政清感状（『大日本



古文書 益田家文書之一『一七二号』が発給され、いよいよ忠節を尽くすように伝えている。

後者の史料には「為 上意、定可有御感候」とあることから、政清から將軍に取り次がれたことが分かる。つまり、河内国の現場では是豊が参陣し、政清は京都にあつて取次の役割を果たしていたと考えられる。

- (58) 享徳四年六月十九日山名常勝(教清)安堵状(『大日本古文書 益田家文書之三』五四九号)。宛名は記されていないが、封紙に「益田熊次郎殿」とあることや内容から考えて、益田熊次郎宛である。

- (59) (享徳四年) 六月十九日高山統空(清重)書状(『大日本古文書 益田家文書之三』五五〇号)。

なお、この一件については、後日トラブルで延引しており、改めて「御判」と「加判之奉書」によつて安堵されたことが判明する。(享徳四年) 六月二十日大町清量書状(『大日本古文書 益田家文書之三』五五〇号)を参照。

- (60) 実際に政清が発給した文書は、(享徳四年) 六月十九日山名政清書状(『大日本古文書 益田家文書之三』五四八号)である。

- (61) 応仁二年十月二日細川勝元書状写(「石見内田家文書」九一号)。

- (62) 年未詳十月二日細川勝元書状(『秋藩閥閥録』第二巻、卷四三)。

- (63) (応仁元年) 八月二十二日山名政清書状写(『俣賀文書

(日本大学所蔵)四三三号)。

- (64) 文明十三年四月七日難波行豊軍忠状(「難波文書」三号『岡山県史』第二十巻・家分け史料)など。赤松氏は嘉吉の乱で滅亡し、播磨・備前・美作三ヶ国の守護職を失い、それらは山名氏一族に分配された。

- (65) (応仁元年) 九月二十二日某義宗書状(『俣賀文書(日本大学所蔵)四四号)。

- (66) (文明元年) 十二月六日山名政清書状(『大日本古文書 益田家文書之三』五九一号)。なお、同文の史料として、(文明元年) 十二月六日大内政弘書状(『大日本古文書 益田家文書之一』一八四号)がある。大内氏はかつて石見国守護職を保持していたことから、混乱に乗じて益田氏の支持を取り付けるために幕府に要請したものであろうか。以後、石見国内に山名氏の動静が見えず、逆に(文明四年) 十一月十五日陶弘護判物(『大日本古文書 益田家文書之一』一八五号)によつて、貞兼に西豊田の知行が安堵されたことを確認できる。当該期の史料は乏しいが、おおむねこの頃を境にして、大内氏が再度石見国へ勢力を伸張させたと考えられる。

- (67) 太田順三「嘉吉の乱と山名持豊の播磨進駐―「室町幕府守護体制」のモノクローム―」(『民衆史研究』九号、一九七一)。

- (68) 岸田註(4)論文および久留島註(11)論文を参照。